

第5話 本棚をめぐる冒険

2000冊や3000冊ぐらい処分したところで、ほとんど減った気がしない。2万冊あるやら3万冊あるやらさっぱりわからない。規格もさまざまな本棚がすべての壁を覆い尽くし、本棚には本がひしめきあって、その前に人も通れぬほど本の塔が積みあがっている。床は散らばった本や雑誌を踏まないとは歩けない。

自分では整理しようにも、どこから手をつけてよいやら、ほとほと困り果てた状態の蔵書生活である。こうなったら、本棚からはみだした本はすべて、目をつぶって売るしかないだろう。おそらくそれだけで1万冊はあるだろう。ひっこしてきたばかりの、爽やかで晴れやかな蔵書生活をなんとか取り戻したいものだと、本気で思っている。

「1Q84」と言えない人たち

最近、読書好きの友人からこんな話を聞いた。職場の同僚と、どういうことからか話題が「本」になり、そのとき社会現象とも言われた村上春樹の新作『1Q84』の話が出た。その同僚は、せいぜい月に1冊、ビジネス書や実用書を読む程度の人で、およそ文学にも読書にもまったく関心がない。彼が村上春樹の新作のタイトルを口に出そうとして「あのムラカミハルキの『イチキュウ』……あと、何だっけ？」と詰まった。

そんなもの、なのである、一般の人は。あれだけ、新聞、週刊誌でページを割いて取り上げられ、情報番組でもさかんに書影とともに、出演者の口から「イチキュウハチヨン」と音で繰り返されても、興味のないことは、通り過ぎていってしまうのである。こういう人の部屋には、たいてい本棚がない。必要ないからだ。情報を得て、読み終わった本は用済みで、売るか捨てるか、人にあげるかして、手元に残さない。本に対する愛着もないのだ。「蔵書の悩み」ということばに縁のない人たち。ある意味、うらやましい。

私は書評を中心としたライターで、知人友人にも同業者を含め、編集者や本好きが多いから、顔を合わすとすぐに出版や本の話になる。売れ筋より、ちょっと渋めの部数も少ない本に集中する傾向はあるが、それでも『1Q84』は別格だった。おそらく話題になった数ヶ月のうちに50回は『1Q84』と口にしたと思う。天気の話がわりに『1Q84』という感じであった。あんまり「イチキュウハチヨン」と言い過ぎて、とんち小僧の「一休さん」でさえ、「いちきゅうはちさん」と言い間違えそうなくらい、もう「いちきゅう」と来れば「はちよん」である。当然である。

本のことしか興味のない人間と、本の情報は一つのニュースにすぎない人間とでは、本に関する感度や思い入れ、あるいは知識において、信じられないくらい隔たりがあるということが、ここでは言いたいのだ。

本棚一つで「わあ、本がいっぱい！」

山田洋次監督、高倉健・倍賞千恵子主演の映画「遙かなる山の呼び声」（1980年）が私は大好きで、これまでに5回や6回は観ている。舞台は北海道。酪農で生計をたてる母子がいて、そこへふらりと男が現れ、「働かせてください」と言う。夫を失った女が倍賞千恵子で、男が高倉健だ。名画「シェーン」を下敷きに、西部劇を現代日本の風土に翻案したこの作品は、大人の男と女の愛情物語でもある。

ある日、九州から倍賞千恵子の従弟夫婦が新婚旅行のついでに、車を飛ばして訪ねてくる。武田鉄矢と木ノ葉のこだ。ここで印象的なシーン。部屋へ上がって、箆笥の脇に木製の大きな本棚が置いてあり、それを見た「このはのこ」が思わず言う。「わあ、本がいっぱい！」。それを聞いた武田鉄矢は「義兄さん、文学が好きやったもんね」。

しかし本棚をよく見ると、5段ぐらいの棚に、本が並んでいるのは、せいぜい200冊ぐらい。戸棚がわりに置物が並ぶ棚もある。本の量としては、あきらかに大したことはない。いや、別にケチをつけようというのではない。亡くなった義兄、つまり倍賞の夫は学者や作家ではない。決まった就労時間のない、肉体を酷使する酪農という仕事に従事している。近くに本屋もない。おそらく学生時代に買い溜めた本を、売ることもなく、ずっとそのまま持ち続け、仕事のほんの合間に読んでいたのだろう。過酷な生活のなかで、つかのまの息抜きとして読書があった。200冊あれば、十分とも言える。少なくとも、彼に「蔵書の苦しみ」はなかった、と思う。

小屋を大きくしたような、実用一点張りの2階建て住居。そこに、大ぶりの本棚が一つ、デンと腰を据えて鎮座している。この光景はなかなかいいものだ。そこに本が全部埋まっていなくても、いまは亡き主の風格のようなものを感じさせる。私は「遙かなる山の呼び声」を観るたびに、この本棚が出てくるシーンになると、「来た！」とちょっと身構え、集中するのだ。

それほどいい感じのシーンではあるが、木ノ葉の「わあ、本がいっぱい」発言は、やっぱり、ちょっと衝撃的だった。役の上での話だが、おそらく彼女の部屋に本棚はないはずだ。だから、一竿の本棚に目がくらむ。本棚一つで「本がいっぱい」なら、40以上ある我が家は、どう表現してもらったらいいか。

「ジョゼ」は本棚なんかいない

本棚のことで思い出した映画がもう一本ある。犬童一心監督「ジョゼと虎と魚たち」（2003年）がそれ。原作は田辺聖子作の同名短篇。フランソワーズ・サガンの小説に出てくる主人公にちなんで、自分のことを「ジョゼ」と呼ぶ女の子（池脇千鶴）。彼女は足が悪く歩行がままならず、祖母とたまに乳母車に乗せられて外出する以外、じっと家にとじこもって本を読む。そんな彼女と知り合った大学生・恒夫（妻夫木聡）は、次第に不思議な

魅力を放つジョゼに惹かれていく。

妻夫木、池脇の新鮮な演技もあいまって、映画としての評価も高かった作品だ。ジョゼは、古い平屋の木造長屋に祖母と 2 人っきりで住んでいるが、彼女が寝起きする部屋は、いたるところ本だらけ。どうも祖母が外で拾って来たものらしい。ジョゼは子ども向けの学習シリーズから、内外の文芸書まで、ツンドクではなくてちゃんと読んでいる。

そんななか印象的なのが、何度か画面に登場するフランソワーズ・サガン『一年ののち』だ。この小説の主人公の名が「ジョゼ」なのだ。彼女は気に入って、これを自分の名前にしている。ここで重要なのは、サガンをほとんど一手に文庫化している新潮文庫判ではなくて、もとの 1958 年刊の単行本が小道具として使われていることだ（いずれも朝吹登水子訳）。装丁者のクレジットはないが、これが、華奢な函入りで何ともいいたたずまいの本なのだ。ちなみに単行本も文庫も品切れ中。アマゾンで検索をかければわかるが、「この商品を買った人はこんな商品も買っています」のところに、『ジョゼと虎と魚たち』の文庫も DVD も顔を出す。映画を観れば、誰だって『一年ののち』を、とくに単行本版で読みたくなるはず。新潮社は復刻する機会を逃してしまった。アマゾンでは文庫版の中古品なら容易に手に入るが、単行本の方は稀少で値段も高い（「日本の古本屋」のサイトでは、2011 年 2 月末現在、1 点がヒット。2500 円がついている）。

いや、ここでしたいのはそんな話ではなかった。ジョゼと呼ばれる女の子が、たくさんの蔵書をどんなふうに置いているかだ。映像で観るかぎり、彼女は本棚を持たず、すべての本は畳の上、押し入れの中に積み上げている。殺風景な部屋のなか、本だけがいたるところに山を作っていて、さしずめ、本の城にとじこめられたお姫様、というイメージか。

ジョゼが本棚を持たない理由は簡単で、祖母と二人暮らしの貧しい家庭で、本棚を買う金銭的余裕がないこと。それに、自分の足で立つことのできないジョゼにとって、本棚に本を並べても、上の方の段には手が届かない。座って、自分の頭の高さぐらいに積み上げた方が、よほど合理的と言える。

きちんと整理して区分けされ、積み上げられているわけではないが、たぶん彼女の頭のなかでは、どこに何があるか、わかっているのだろう。ジョゼに本棚なんか必要ないのだ。

本棚なんかない蔵書生活

私のように、中学生のときに自分専用の本棚を買ってもらってから、そこに本を並べるのを無上の喜びとしてきた人間にとって、そもそも本棚のない蔵書生活というのがあまり想像つかない。

しかし、ここに登場する「退屈男」（ブログのハンドルネーム）さんは、大変な本読みながら、つい最近まで一人暮らしの下宿に本棚はなかった。

「本を積まずにはいられない人のために」と副題のついた、南陀楼綾繁編著『山からお宝』（けものみち計画）には、本来は住居空間たる部屋が本に侵蝕され、ほとんど困り果てた

人たちがばかりが登場する。ここに口絵カラーグラビアつきで、自らの本棚なし生活を語っているのが退屈男さんである。

「小さな工夫を重ねて」とタイトルのついた文章の冒頭を引く。

「私の部屋の本の山は、コンロ流し台の前と寝床のほか、すべてに形成されています。片側に段ボールを積みあげた玄関は身体をひねらなければ上がりませんし、クローゼットを開くのもひと苦勞です。いや、敷蒲団の両端にも本は乗り上げてきて高く壁を築いていますから、谷を流れる河川のような万年床のみが生活の場というわけです」

なんだか、コロラド溪谷を自然を愛でながらトレッキングするような優雅な描きっぷりだが、掲載された写真を見ると悲惨の一語に尽きる。腰の高さ以上に積み上げられた本に、部屋は完全に占領され、まさに倉庫状態で、泥棒が入っても、まさかそこに人が生活しているとは思えないだろう。唯一残された万年床の空間（このスペースのみ本が積まれている）も、すぐ脇の壁際にこれまた本の山が列を成しているのだから、地震が来たらひとたまりもない。身体は本で埋まってしまうだろう。「蔵書の苦しみ」で言えば、一つの究極の実例といってもいい。

あこがれの東京は本の街

どうしてこうなってしまったのか。「退屈男」こと本名・関田正史さんに話を聞いてみた。関田さんとは、路上で素人が古本を売る「みちくさ市」ほか、本に関するイベントや飲み会でしょっちゅう顔を合わせているが、本人にちゃんと話を聞くのは今回が初めて。以下、いつも呼び慣れた「退屈くん」を使わせてもらう。

退屈くんは、1982年新潟県小千谷市生まれ。取材時点では、まだかろうじて20代。若い！高校まで故郷で過ごし、大学（法政大学法学部）入学のため上京してきた。このとき、板橋区の6畳1間アパート（風呂トイレ付きで家賃6万円）に下宿し、そのままつい最近まで住んでいた。卒業後、引っ越せなかったのはひとえに「本の山」のせい。

故郷にいた頃は、近所に小さな古本屋があったが、「いわゆるゲームとマンガが中心のリサイクル店で、ちゃんとした本を探すには長岡（市）へ出るしかなかった」という。日ハムファンの父親に連れられて、夏休みになると野球観戦のため上京、東京ドームへ行った。ドームの近くには、スポーツ書が充実した「山下書店」があり、ここでスポーツ関係の本や雑誌を買うのを楽しみにしていた。

それに、「東京と言えば『神保町がある』』という認識を早くから持っていたようで、高校生になると単独で上京。喜び勇んで神保町へ出かけた。「よくやる間違いですが、最初、神田神保町というので、『神田』駅で降りてしまった。「神田」駅から本の町「神保町」はかなり離れている。それでも憧れの神保町へ詣でて、このときは「ちくま文庫」を袋一杯

に買って帰ったという。

そんな本好きの男が、東京で大学生活を送ることになる。結果は知れたことで、ほとんど毎日、本屋と古本屋を巡る日々が始まった。「アパートの最寄り駅は『江古田』だったんですが、大学に入った10年ほど前は、江古田駅周辺にはまだ古本屋がたくさんあったし、よく歩いて上板橋や池袋まで散歩していました。そのたびに本を買って帰るために、目に見えてどんどん増えていった」。まだ、増えていくのが楽しい「蔵書の喜び」時代であった。

段ボール箱ブロック方式

増えていく本に対して、本棚を買わなかったのは、単にその金があったら本を買ったから。そこで、本を段ボールに詰めて、それを積み木のように積んで、ブロックを作っていく方法を編み出した。

「だいたい、箱に入れる本のジャンルとかは決めておくんです。まあ、例えばたくさんある本、『植草甚一スクラップブック』とか、山田風太郎の明治ものとか、ある程度の量になるものは一つの箱に入れておく。箱には何が入っているか、書いておきます」。

それを順に壁際からきっちり積んでいく。そうすると、あとで欲しい本があった時、それを順に崩していけば、目当てのものにたどりつく、というわけ。いちばん手前の、新しい段ボール箱は、一辺を切り抜き、枠をガムテープなどで補充して、本の背が見えるような工夫をした。しかし、それでも本が増えていくと、奥の奥にある箱は当然ながら死蔵されるし、箱に入れないまま積み上げられた本や雑誌も次第に壁を覆う蔓のように、とめどもなく繁殖し、人が住む部屋とは思えなくなってきた。

「一度、ベランダの非常梯子を点検するため業者が来たことがあるんですが、ベランダに行くためには、唯一残されたスペースである万年床を通るしかない。『長いこと、この仕事をしていますが、お客さんの蒲団を踏んで通ったのは初めて』と言ってました」

退屈くんは笑ってそう言うのだが、笑ってる場合じゃないだろうという気もする。この部屋に、いまは一緒に暮らす彼女が訪れたこともある、というからオドロキだ。

退屈くんは結局、大学に5年通って無事卒業。スーツを着て就職活動もしたが、最初の就職合同説明会が、父親と夏休みごとに通った東京ドームで開かれたとき、入口から入り、会場のブースの脇を素通りして出て行って、そのまま神保町へ行ったというから強者である。

ついに本棚生活

無事、大手の新刊書店員として勤めるようになるが、彼らの世代はいわゆる「ロスト・ジェネレーション」と呼ばれる、就職氷河期の卒業組で、正社員として採用されたわけではなかった。好きな本にたずさわる仕事とは言え、条件面では厳しく、結局退職してしまった。現在は、都内の区立図書館に勤務している。

「収入のうち、遊びで使うのは野球観戦ぐらいで、あとはほとんど本の購入費に宛てます。大学時代も、口に入れるのは学食でライス小、豚汁、それに 60 円のひじきを一品つけるぐらい」

本のエンゲル係数がめちゃくちゃ高い。

そんな、本に身を挺する独り身生活におさらばするときがついに来た。長らく付き合っていた彼女(書店員)と同居することになり、10年間住んだ部屋に溜まりに溜まった本は、少しずつ処分整理していった。とにかく半端ではない量なので、一気に、とはいかない。経済的に苦しいときは、とりあえず紙袋に詰めてブックオフへ持ち込んだし、知り合いの古本屋さんにも段階的に引き取ってもらった。前述の「みちくさ市」、それに池袋の古書店「往来座」で定期的に催される外壁を使った、同様の素人参加型古本市でも本を処分していった。

「2年くらいかけて、減らしていったんです。『ダイエット』と呼んでます(笑)。一緒に暮らす相手も本好きで、相当量の蔵書がある。御互いのダブリを睨みつつ、要不要を選択しました。段ボール箱に運び出す本を詰めていくんですが、やっぱり迷いがあって、同じ箱を何度も開けたり閉めたりして、5、6回の審査を経て、ようやくあきらめがつく。その頃、図書館で勤め出していたので、図書館で借りて済む本と、自分でどうしても持っておかなくちゃならない本の見極めがついた。それでも、段ボール 70 箱は新居に運びました」

本棚はやっぱり便利だった

2人で蔵書生活を共有するにあたって、退屈くんが自ら課したスローガンがある。

- 一つ「床に本を積んではならない」
- 二つ「脱段ボール宣言」
- 三つ「背表紙の可視化」

この三つは、これまでの糞虫生活にはなかったことだ。プライバシーがあるので、新居の間取りなどの詳述は避けるが、室内の写真を見せてもらった限り、壁はすべて本棚が設置されている。「背表紙の可視化」が実現された、美しい部屋である。「蔵書の苦しみ」の影は、まだ片鱗さえない。

ところで、本棚のある蔵書生活を実現した退屈くんの感想は？

「いやあ、すごく便利なものですね、本棚があるって(笑)。なにより、背が見えているから、欲しい本が必要なとき、すぐ取り出せる。また、空っぽの本棚に、段ボールから出した本を並べる作業が楽しかった。よく手に取る機会の多い本を固めておいたコーナーは『VIP棚』と名づけたんですが、ここに野球名鑑や文庫の解説目録、事典類を置いています」

部屋をまんべんなく写した写真を見せてもらったかぎり、衣裳を置くスペースや、衣裳

箆筒が見当たらないが、これは「押し入れがパンパンになるほど突っ込んである」とのこと。衣裳より本の2人、なのである。